

昭和前期におけるイスラーム研究

——回教圏研究所と大久保幸次——

大澤 広 嗣

〈論文要旨〉 本論は、宗教研究史の視点から、トルコ学者の大久保幸次が所長を務めた回教圏研究所について、昭和前期のイスラーム研究史における意義と位置付けを試みたい。

日本のイスラーム研究は、一九三七年の日中戦争勃発を機に組織化され、「大東亜共栄圏」建設を目的として、複数の機関で調査研究された。一九三八年に大久保は、小林元や松田壽男と共に回教圏攷究所を創設した。一九四〇年回教圏研究所と改称後、一九四五年の敗戦で解散した。

しかし戦後以降、昭和前期のイスラーム研究は、国策や時局と結び付いて研究された側面だけが語られ、その全般的な研究史が軽視されてきた傾向があった。だが回教圏研究所の活動を検証すると、大久保は大正期よりトルコやイスラームを研究し、研究所からは戦後も活躍する中東研究者を輩出したなど、研究史上において重要な意味を持つ研究機関であることがわかるのである。

〈キーワード〉 近代日本の宗教研究史、「大東亜共栄圏」、イスラーム、国策、学問の政治性

一 はじめに——研究史への評価をめぐる——

日本でイスラームは、国際政治経済の文脈で語られる宗教、文明であると言われることが多い。とくに冷戦終結後、イスラーム世界での事件や情勢変化を受けて巷間でイスラームが話題にされることが増えているのは、その是

非を別として事実である。

だが、そのような日本とイスラームの関係が、決して新しいものではないことは今では忘れ去られている。かつて昭和一〇年代の日本においても、情勢や社会の動きに即応してイスラームが研究されていた。組織的なイスラーム研究体制が編成された契機は、日中戦争に他ならなかった。⁽¹⁾しかし、その経緯は、宗教学はもとよりイスラーム研究内部でも現在ではあまり語られない。その原因は何であろうか。

私見では、それには少なくとも二つの大きな原因がある。一つは、国策と学の共役関係、ならびに国家主義者の大川周明によるイスラーム研究⁽²⁾が、戦前のイスラーム研究の全てであるかのように見られてきたため、戦前への反省の結果が、盥の水ごと赤子を流す事態となったのである。例えば杉田英明は、「国粹主義が擡頭し大東亜共栄圏の主張が声高になされる時期になると、大陸や南洋の「回教政策」の面で、中東世界への新たな関心が喚び起こされた。軍部と結びついた中東研究は、一九三〇年代に多くの研究機関——回教圏研究所（大久保幸次）・大日本回教協会・東亜研究所・満鉄東亜経済調査局（大川周明）——によって担われ⁽³⁾」たと概括する。昭和前期のイスラーム研究史に関する説明は、軍部や国策との関わりのみが強調されて、大まかな記述も多く、研究活動の詳細に迫った検証は少なかった。前嶋信次などの戦前から戦後にかけて活動した当事者達の回顧録は存在するにせよ、⁽⁴⁾その次世代以降からの研究史はなかったといっても言い過ぎではない。極東国際軍事裁判でA級戦犯とされた大川周明の存在を忌避するあまり、昭和前期のイスラーム研究全体が等閑視されてきたのである。しかし近年、臼杵陽らの中東・イスラーム地域研究者のなかに、当時の研究史を再検討する動きが見られる。⁽⁵⁾臼杵は、「戦争そのものが問題なのではなく、たとえ戦争を機に蓄積されたものであっても、そのような知の蓄積がほとんど継承されてこなかっ

たことに日本での知のあり方の深刻さがある。その典型が戦前の回教研究と戦後の中東イスラーム研究の断絶である⁽⁶⁾」と指摘する。

もう一つの原因は、戦前のイスラーム研究は、オリエンタリズムの問題や政治と学の関係が意識化される前のものであるゆえに、今日から見れば国策と一体となった研究は継承に値しないとされていることである。だが、筆者の見るところ、戦前の研究者が自分たちの学の政治性に全く無自覚だったとするのは早急である。一例を挙げよう。

戦時中に東亜研究所や東方文化学院の嘱託として中国イスラーム史を研究した田坂興道は、その成果をまとめた戦後の著作において、イスラーム研究と時局との関係を次のように示唆している。

従来文字通り水温の低かった我が国の回教学一般は、私の研究期間中、年と共に発展したのである。この傾向は、満洲事変後に萌芽し、日華事変勃発以後急速に伸長し、更に太平洋戦争によつて拍車を加へられたのであつた。……勿論これ等は現実の事態に即応し、国策に寄与するのが第一線であつたに相違ないが、勢の赴く所、当面の政治・経済問題や民族問題から次第に純学問的なテーマを追及するに至つたのは、極めて当然の現象である。従来この宗教に冷淡であつたわが宗教学界や帝国学士院までが関心を寄せて来た⁽⁷⁾。

この分析には、国策に寄与する研究と純学問的な研究を自覚的に区別していたなど、自分たちの学の政治性がある程度、客観視していたことが窺える。

つくくわえれば、当時の研究において「回教」の用語を使用したことが、現在のイスラーム研究者からすれば、偏見を伴った研究と評される要因にもなっている。「回教」は、今日では適切な呼称として使用されない。その語

源は、イスラームを中央アジアのウイグル（回鶻）人の宗教と誤認した中国人が、明代より「回回教」「回教」などと呼称したことによる。したがって「回教」を使用した研究は、誤認をそのまま引き継いだ研究と評される⁽⁸⁾。

しかし、実のところ当時の研究者は、「回教」が誤称と知りつつも、学術用語に漢語を多用する時代的な制約（例えば「基督教」「猶太教」など）もあって、この語を慣習的に使用していたのである。回教圏研究所編の『概観回教圏』には、次のような説明がある。「回教は、ときに、「回回教」とか、「マホメット教」などとも呼ばれる。しかし、これらの呼び名は、いずれも本来の呼称ではない。……／＼しからば、回教の正しい呼び名は何かといへば、それはアラビア語の本来の呼び方である、「イスラーム」すなはち「イスラム」である⁽⁹⁾」。

このように、戦前と現在のイスラーム研究を、かたやコロニアル、かたやクリティカルと峻別し対置するのは危険であり、生産的ではない。過去の研究をふり返り、現在との繋がりを検証することこそ、いま必要とされているのではなからうか⁽¹⁰⁾。

そこで本論は、回教圏研究所（一九三八年「回教圏攷究所」発足、一九四〇年改称。一九四五年解散）を取り上げ、所長のトルコ学者・大久保幸次（一八八七—一九五〇）の人物像を軸に、イスラーム研究史におけるその意味を考えてみたい⁽¹¹⁾。大久保の一般的な認知度は高いとは言えないが、前嶋信次によれば日本で最初に中東研究を始めたのは、アラブ研究者ではなく大久保幸次や内藤智秀らのトルコ研究者であつたとも指摘している⁽¹²⁾。本論では、これら初期のイスラーム研究者がどのような人々であり、どのような社会情勢の中、何を考え研究に携わったのかについて、「厚い記述」を試みる。筆者はイスラーム研究者ではないため、戦前のイスラーム研究の内容に関して、どの部分が今日も引き継がれているか、あるいはどの部分が新たに評価できるかについては論じることができない。あくまで宗

教研究史（学問史）の一環としてこの時期のイスラーム研究をとらえるというのが筆者の立場である。しかし、厚い記述によって学知と社会との関わりをつぶさに見ていくことは、イスラーム研究における戦前の研究の再評価に對しても基礎的な部分で寄与するものと考ええる。

なお、日本のイスラーム研究が、東洋史など主として歴史研究において行われてきたのは、大学制度によるころが大きいと思われる。羽田正は、文学部史学科の東洋史専攻では、中国以外のアジア地域が研究対象として可能であり、中東やイスラーム世界に興味を持つ学生が、研究を続けていくことを制度として保証したと指摘する。羽田自身が学生時代を過ごした一九七〇年代でも歴史学を専攻することが、中東、イスラーム世界に接近する早道だったという。⁽¹³⁾したがって、戦前の宗教学者によるイスラーム研究、例えば赤松智城、小口偉一らの業績も無視できないが、歴史学者のイスラーム研究に比べ規模が小さいことは否めない。本論では詳述せず、対象を歴史学系のイスラーム研究に限定する。

二 大久保幸次の人と学問について

大久保幸次について、回教圏研究所の研究員だった竹内好は、大久保の年忌法要に参列した当日の日記（一九六二年四月一五日付）で次のように回想している。

大久保幸次氏の十三回忌が牛込の幸国寺である。大久保氏はトルコ学者で、回教圏研究所の所長だった。私が大学を出て、はじめて正式に就職したのがここだった。……／あのころの研究所には、小さいながら一種の梁山泊の雰囲気があった。それがなつかしいからだろう、大久保忌にはいつも変った顔ぶれが集る。それが楽

しみて私もほとんど毎回参加した。異端者がより集って一つの学風をつくろうとした実験例としてこの研究所の歴史は重要に思う。……／私はこの研究所の時代に、イスラムの智識以上のものを学んだように思う。私は大学からはほとんど何も学ばなかったので、中国文学研究会をのぞけば、この研究所が唯一の鍛錬の場所だったといえるかもしれない。いま、私は小規模の研究会にいくつか関係しているが、研究集団の運営については回教圏研究所時代の体験が大いに参考になる。⁽¹⁵⁾

竹内が触れた「小さいながら一種の梁山泊の雰囲気」とは、所長大久保の資質に起因する。竹内は、大川周明について論じた別稿では両者を比較して、「私たちのボスの大久保幸次さんは、どちらかというと詩人タイプの人で、情緒はゆたかだけれど論理の骨組みは太くない。大川はそれとまったく反対のタイプなので、二人はあまり仲よくなかったけれども、私は両方ともすきでした⁽¹⁶⁾」と述べている。竹内にこのように語られる大久保の人生と回教圏研究所の成立を時系列的に見ていきたい。

大久保幸次は、一八八七（明治二〇）年七月一九日、東京牛込で生まれた。大久保家は徳川家直参で三河以来の譜代の家系であったという。愛日尋常小学校（現新宿区立愛日小学校）、早稲田中学を経て、東京外国語学校（現東京外国語大学）独逸語本科に進み、日本におけるドイツ語教育の先駆者である山口小太郎に師事し、一九一三（大正二）年三月に同期一六人中、次席で卒業した。その後は『独逸語学雑誌』（独逸語学雑誌社）に参加し、同年一月発行の一六巻三号よりドイツ語教材の執筆を手がけている。同誌は山口小太郎が編集主幹を務めていたが、後に大久保が編集主幹となる。その頃、大久保は東京帝国大学文学部史学科の選科生となり東洋史学を専修した。帝大では、小学校の同級生だった大村謙太郎とも机を並べた。後に大村は、戦前は大日本回教協会理事長を務め、戦後は

旧協会調査部の学術研究の継承を目的に、一九四八（昭和二三）年、日本イスラム協会を設立した。だが協会は、その運営基盤の弱さから研究活動がほとんど行われなかった。大村が没した翌年の一九六三（昭和三八）年、理事長を松田壽男に、理事を蒲生礼一、前嶋信次、松林亮、内藤智秀、嶋田襄平とする新体制で協会が再建され、現在に至っている⁽¹⁷⁾。

さて大正期より、大久保にトルコやイスラームへの憧憬が芽生え始めていた。参加していた『独逸語学雑誌』では、ドイツ語教材の執筆と並行して、同誌にトルコやイスラームに関する論考を発表した。例えば一九一五（大正四）年、「コラーンの研究」（全三回）を連載している。同稿はドイツ語訳のクルアーンを使い、ドイツ語学習の読みに仕上げている。初回の内容は、イスラームの基礎知識に関する話題を取り上げているが、ここにはイスラームに対する大久保の考え方が表れている。少々長くなるが、引用したい。

Arabien の人 Monammed (571-632) なるものが、回々教を唱道したとばかりで、此の教や、此の教徒が、我国と直接の関係を有しなかつたり、あまり、基督教と西洋文明とが、ドシドシ、入り込み過ぎたために、是まで、我国人が、之に対して、無頓着であつた。然し、是は決して当を得た事では無く、此の Religion の過去、現在及び将来を考ふるときは、是を研究する事の非常に Wichtig である事が解るのである。／まづ、其の Vergangenheit を云はうなら、此の Religion の世界の Kultur に尽した功は決して少くはない。Europa の暗い時代に當つて、Sarazenen の Zivilisation は燦然として、所謂 Orient の地を輝らしてゐた。Philosophie, Literatur, Baukunst, 各種の Wissenschaften 等其の発達著しく、実に、現今、欧人の誇る現代の西洋文明の Fundament の最も主要なる部分を供給したのである。而も、此の Religion が Kultur の破壊者のや

うに、欧人から罵られるのは、実に、宗教の相違所謂宗教敵であるからであるのだ。回々教の文明を利用した、Europa が、世紀と共に、益々発展するに反して、本元の回々教徒は、徒らに、旧態を固守して倒々新時代の趨勢に遅れ、終に、現今のやうな哀れな状態と成つてしまった。而して、其の教徒の Kultur なるものが、渋滞したと同時に、其の教徒の政治的勢力も亦失はるるに至つた。即其の邦国の大部分は今や、Europa 諸国の領土と化し、回々教中第一の文明国にして、又第一の強国たる Türkiye すら、あゝした、派目に成つて居る位である。⁽¹⁸⁾

この文章からは、イスラームに対して同情的であり、西洋に対してはいささか批判的なニュアンスを読みとることができる。イスラームと西洋の関係について、大久保がこのような視点を得たのは、大久保自身の内発的なものによるのか、外部からの影響によるのか、確定は難しい。ただ、反西洋的視点だからといって、西洋からの影響ではないとは言いきれない。西洋のイスラーム研究は、十九世紀以降にアラビア語原典が利用されるようになった頃には社会一般での偏見が残っていたにせよ、少なくともアカデミズム内部においては中世以来の偏見の多くが払拭されてきたからである。それまでのムハンマドへの人格攻撃など、イスラームに対する偏見に充ちたキリスト教の護教論からは離れていたのであった。⁽¹⁹⁾ ゆえに、大久保は、西洋による研究成果を受容した結果、右記のような見解を持つに至ったとは十分に考えられる。

大久保は、一九一八（大正七）年に東京帝大選科を修了し、一九二二（大正一一）年まで『独逸語学雑誌』の執筆に参加した。並行して、『外交時報』（外交時報社）、『国際連盟』（国際連盟協会）、『解放』（大鑑閣）、『改造』（改造社）などの誌上で、トルコ研究の論文を発表した他に、外務省調査部嘱託として調査業務にも関わっていた。

この頃に大久保は、トルコ語の独習を始めた。前嶋信次が蒲生礼一から聞いたとされる話によれば、大久保は「オットー・ザウエル版の『トルコ語文法書』をつかって勉強されたが、あの本は昔のドイツ式の堅牢な装釘である。それを読んで読んで読みつぶし、新しいのに換えて、また読みつぶし、また新しいのに換えるという風に三冊つぶしてしまったという噂を聞いた⁽²⁰⁾」という。当時は、ロシア革命（一九一七年）によりロシア領内から避難した、テュルク系民族でイスラームを信奉するいわゆるタタール人が、満州、朝鮮、日本などの極東地域に移住しており、各地でコミュニティを形成していた。そのため日本においてトルコ語を使う場面は、機会さえ設ければそれほど特殊な状況ではなかった。大久保は、「トルコ民族や、回々教を研究の課題としてゐる自分は、このトルコ・タ、ル人に対しても非常ななつかしみを感じてゐたので、次第に彼等の或る者とは交際を結び、今では彼等の中で私を知らないものはないやうになつた⁽²¹⁾」のであった。

大久保によるタタール人への眼差しも見ておきたい。「彼等是一口にタ、ルなどと呼ばれてはゐるが、韃靼を意味する其の名は決して正当のものではない。何故なれば、タ、ルは元来モンゴル民族でトルコ民族ではないから。……トルコ民族の名が時に又トルコ・タタル (Türk-Tatar) と長たらしく呼ばれるやうになつたのも、彼等がトルコ人たることを知らせるためである⁽²²⁾」と説明する。さらに同稿で「アラビア人に初めて接触したトルコ諸族を最も強く刺戟したものは信仰の問題であつた。……しかるに今や彼等はアラビア人と交はるに及んで、イスラームなる新宗教の福音を天籟の声と聞いた。彼等は、最後にして最大なる教祖マホメットの教戒の中に、従来の諸宗教に見出し得なかつた幾多の貴い宝玉を発見した。彼等の霊は、今や、独一无二、無始無終の大神アルラーの御前に跪かんとしたのである⁽²³⁾」と記しており、大久保によるイスラームへの視点は、タタール人への共感的理解に支えられ

ていたことが窺えるのである。

大久保は、一九二三（大正一二）年、曹洞宗大学講師に就任した。当時の学長は、忽滑谷快天^{ぬかりやかいてん}であつた。忽滑谷は、『怪傑マホメット』（井冽堂、一九〇五年）や翻訳『心霊之謎』（アディントン・ブルース著、門脇探玄と共訳、森江書店、一九二二年）を著すなど、多方面に関心を示した禅学者である。曹洞宗大学は、一九二五（大正一四）年に大学令による大学として認可を受けて駒澤大学と改称し、同時に大久保は教授へ昇任した。一九四一（昭和一六）年一二月に、学内内紛に伴う集団辞職まで在任したが⁽²⁴⁾、講義は文学部人文学科や東洋学科では文化史や回教史、専門部歴史地理科や予科では、東洋史や日本史などを担当した。後に回教圈研究所員となる鏡島寛之は予科で教えた学生のひとりである。

大久保の講義を受けた山内舜雄氏（一九四二年仏教学科卒）によると、大久保による専門部の東洋史の授業は、学部学生も聴講に来て立見の生徒も出たが、それはイスラームを研究する大久保ゆえに、歴史観が他の教員と異なり、面白い授業であつたからだ⁽²⁵⁾という。菊地良一氏（一九三八年東洋学科卒）は、大久保が黒板に上手な絵を書きながら、授業を進行させていたことが思い出にある⁽²⁶⁾という。大久保には、トルコ童話を収録した著書（『殿様の夢——世界童話名作集六』精華書院、一九三二年）があり、同書の装丁と挿絵も自分で手掛けるなどの画才もあつた。

音楽を趣味とした大久保は、課外活動で学友会音楽部の顧問を務めた。大久保は学内雑誌に、「トルコ人のコンスタンチノープル征服について」（『駒澤大学地歴研究』一号、一九三〇年）、「満洲国の民族文化的縦断面」（『駒澤大学人文学会誌』二号、一九三五年）、「支那回教の特殊性」（『駒澤大学人文学会誌』七号、一九四〇年）などを発表した。

大久保が駒澤大学教授在任中の昭和二三（一九三八）年、駒澤大学教授小林元、國學院大学教授松田壽男と共に、⁽²⁷⁾

回教圏攷究所を設立したのである。

三 回教圏研究所の成立まで

回教圏研究所は、設立までに様々な経緯をたどり発足した。まず一九三二（昭和七）年二月にイスラーム文化研究所が設立され、大久保幸次、小林元、内藤智秀らが参加した。研究所では、トルコ、アラビア、ペルシア語の講習会実施のほか、雑誌『イスラーム文化』を刊行した。その創刊号には研究所の設立意図が示されている。

我々はイスラーム文化に関するあらゆる問題を研究する目的を以て本研究所を設立する。我国に於てイスラーム文化……に関する日本人の知識は、多く欧米人の偏見によつて歪められたところのものに依拠し、……その多くは不純な知識であり、素朴な理解であつた。……今茲にイスラーム文化に対する正しき理解のため、我々の組織する本研究所の、学界及び実社会に対する重要な寄与を信じて疑はない。⁽²⁸⁾

ただし『イスラーム文化』は第一号しか発行されず、活動は一九三三（昭和八）年一〇月発足のイスラーム学会に移した。同学会は、大久保幸次、小林元、松田壽男、宮城良造、八木亀太郎が参加し、会員らによつて『イスラーム諸国の変遷——世界文化史大系第八卷』（新光社、一九三四年）が、分担して執筆された。やがてイスラーム学会を母体として回教圏研究所が設立されるが、その契機は大久保のトルコ視察にあった。

一九三六（昭和一一）年三月、日土協会（現日本・トルコ協会）から、大久保は文化使節としてトルコへ派遣された。目的はトルコの学術調査と日本文化の紹介である。すでに大久保によるトルコ研究は認められており、一九三四年にはトルコ共和国政府から感謝状が贈呈されていたのであった。トルコに渡った大久保は、一九三六年八月のトル

コ言語協会第三回大会では日本代表として参加して、トルコ語による演説を行い、協会の総裁を務めた共和国初代大統領アタテュルクとも面会するなど、文化親善に務めた。大久保はトルコ各地でも講演を行っており、例えばある演説で大久保は、日本国旗・日の丸とトルコ国旗・新月旗を取り上げ、比喩を用いて両者の親善を説いた。「講演の最後に日本の標識は日である、トルコのそれは月であると言つて、その漢字を書き、日と月とが並ぶと明といふ字になる、若し日土両国民が平和と正義のために結合すれば、世界は明かになるであらうと申しますと、全聴衆の拍手喝采は暫し止まなかつた」⁽²⁹⁾という。大久保個人の善意の発言がトルコ側から評価されたのは、トルコの反ロシア感情と日露戦争に勝利した日本への親日感情が背景にあったからである。

大久保の視察はトルコだけでなく、かつてオスマン領だったバルカン半島や、欧州各地にまで及んだ。この視察旅行で大久保は、日本における本格的なイスラームの研究機関の必要性を痛感して、一九三六（昭和一一）年一月に帰国後、設立準備に入った。同時期、大久保幸次・小林元の共著『現代回教圏』（四海書房、一九三六年）が刊行された。同書は「現今の回教世界を展望せんとするわれわれ同胞への真面目な手引書」として企画された図書である。表題の「回教圏」は、小林によれば自身の造語であるという。後に小林は「この発想および表現は、一九三六年わたくしが著書を上梓するにあたって思いついたものである」⁽³⁰⁾と述べている。この「回教圏」⁽³¹⁾が、次なる組織の名称に冠せられた。

一九三八（昭和二三）年四月、回教圏攷究所が正式に発足し、東京市芝区白金三光町二五六番地（現東京都港区白金台五丁目四番一〇号）に設置された。スタッフは、所長兼文化事業部長大久保幸次、研究調査部長小林元、資料部長松田壽男、攷究員野原四郎、宮城良造、囑託蒲生礼一、攷究生井岡峻一らであった。攷究所は、前駐トルコ特命全

権大使で徳川家一七代当主の徳川家正の資金援助を受けて発足したが、やがて財団法人善隣協会が吸収の動きを見せた。

善隣協会は、興亜院の監督下にあった対モンゴルの工作機関で、協会は学術研究にも取り組み、後には蒙古研究所を設置している。善隣協会が回教圈攷究所を吸収した目的は、移管後に発表された「財団法人善隣協会既設事業概要」(一九三九年三月)によると、中国西北地区のムスリム対策を目的として、「時勢ノ進展ニ伴ヒ回教徒工作ノ重要性ヲ痛感シ学術的見地ヨリ基本的調査研究ヲナサシムル」ことを攷究所に求めたからである。すでに大久保は、一九三五(昭和一〇)年に協会が開設した善隣高等商業学校で、東洋史の講義を担当するなど協会と接点があった。また松田と小林も、協会調査部の後藤富男と共に雑誌『蒙古学』を刊行させていたなど、協会と三者の間では人脈がすでにあった。しかし移管に際して協会と攷究所との間の交渉役は、もっぱら小林元が担当したという⁽³²⁾。その結果、「国策に対する大乗的立場において、……純学術調査機関としての本攷究所の面目を維持することを条件として一切の経営を、同協会に移管することに両者の意見は一致⁽³³⁾」した。そして所長大久保の名義による「回教圈攷究所設立趣旨」(一九三八年五月二〇日付)が発表され、各方面に配布された。

今や、アジアの秩序、更に世界の運命は転換の機に立ち、皇国日本の使命や一入重し。この秋に当たりて、我が邦の指導的地位が新らしき情勢に照応せる正しき国策の樹立によりて、初めて確保せられるべきは、既に喋喋の言を俟たずして明かなり。而して、かかる国策の対象は固より多多あるべしと雖も、吾人はその最も重要にして緊急なるものの一つとして、ここに回教徒問題を提言せんとす。……／然るに、我が日本においては該研究の機関なく、またそれに関する大学講座も殆どあることなし。故に、……多年回教研究に従へる篤学の

学徒と相諍り、回教の基礎を築き、我が学界並びに我が国策に対する学的寄与をなさんとの切なる念願をもつて、学的研究機関として「回教圈攷究所」を設立したり。

一見すると趣旨は、国策に与する學術研究という印象を受けるが、国策という側面だけではなかった。常に大久保は、自らが研究対象とするイスラームへの真摯な態度を示していた。攷究所の発足直後の一九三八（昭和一三）年六月、日本文化協会主催による大久保幸次の講演会「回教に就いて」が、東京神田の帝国学士会館で開かれた。大久保はイスラームの概要から話を始め、「右に劍、左にコーラン」の言説に関する見解を述べた。

この句は全く無根拠で、西洋人がつくつた妄想に過ぎません。いひかへれば、回教世界と対立関係にあつて仲の悪いキリスト教世界が回教徒に対する宗教的排他性と恐怖とのためにつくつた悪宣伝に外なりません。劍をぬいたのは政治的經濟的の發展のためで、回教を伝道するためではありません。⁽³⁴⁾

この考え方は、他の研究員にも説いていたようで、竹内好は『劍かコーランか』なんてのは、とんでもない誤解だ、というのが大久保さんの口ぐせでした」と証言している。⁽³⁵⁾

四 回教圈研究所の活動

回教圈攷究所が発足した一九三八（昭和一三）年以降、政治目的からイスラームをめぐる動きが一層顕著になった。同年四月、外務省において「現下ノ國際情勢ニ鑑ミ我國トシテ回教及猶太問題ニ対スル根本策ヲ樹立スルノ必要益々緊切トナレル」⁽³⁶⁾目的から、外務省、陸軍省、海軍省の局長級を召集して回教及猶太問題委員会が組織された。五月、東京代々木に東京回教礼拝堂（現東京ジャミーイ）が建立され、開堂式では玄洋社の頭山満が開扉を行つ

た。九月、大日本回教協会が発足し、東京の軍人会館（現九段会館）で発会式が挙行され、元首相・陸軍大将の林銑十郎が会長に就任した。同協会は、翌年にイスラム文化協会（一九三七年発足）を吸収し、協会調査部を開設した。

一九三九（昭和二四）年第七四回帝国議会にて、政府提出の宗教団体法案に対して、大日本回教協会は法案第一条「本法ニ於テ宗教団体トハ神道教派、仏教宗派及基督教其ノ他ノ宗教ノ教団（以下単ニ教派、宗派、教団ト称ス）並ニ寺院及教会ヲ謂フ」の条文中に「回教」の明記を要求し、イスラームの公認を求めたが実現しなかった。同年一月から一二月にかけて大日本回教協会と東京イスラム教団共催による回教圏展覧会が、東京と大阪の松坂屋デパートで開催され、同展覧会の付帯事業として世界回教徒第一次大会が開催された。

イスラームをめぐる状況に社会からも注目が集まり、小林元は「たちまち目立つてきた回教徒問題関係の新聞記事とかやうな流行現象！ 近ごろの回教徒問題の研究やそれに関する論著の発表、その他は、あたかも熱病的現象のやうに生起してゐる。それが一種の流行でなければ、幸ひである⁽³⁷⁾」と記している。宗教学からも例えば矢吹慶輝は、一九三八（昭和二三）年時にイスラームへの関心を示していた。矢吹は、大正大学教授に在職のまま翌年に没したが、岸本英夫の追悼文によれば「矢吹先生は、……去年（一九三八年―引用者注）の秋頃であつたか、回教研究の問題に触れたことがあつた。回教の研究は従来とも極めて肝要でありながら、それが日本の宗教学に於いてはともすれば閑却され勝ちであつた。然るに、近時、事変以来その研究が急激な勢を以つて興隆しつゝある。而も、注意すべきは、それが宗教学の分野以外で盛んに行はれつゝあることである。宗教学に携はるものとしては、宗教学の問題として、今後回教を如何に研究すべきか、又何の程度に取挙ぐべきかについて、考へをはつきりさせておく必要がある⁽³⁸⁾」と論じていたという。

一九三九（昭和一四）年時の回教圏攷究所は、所長大久保幸次、研究調査部長小林元、攷究員に野原四郎、蒲生礼一、助手に幾志直方、岩永博、服部信彦、金澤誠、囑託に佐木秋夫、川崎寅雄、宮坂好安らが所属していた。この頃に松田壽男は研究所を辞め、小林も一九四〇（昭和一五）年に離れた。小林の脱退は、大久保との対立が原因にあった。一九三九（昭和一四）年、台湾の台南第一中学校教諭だった前嶋信次が、小林から研究所の参加要請を受けた。しかし前嶋は直前に満鉄東亜經濟調査局への採用が内定していた。小林は、大久保に前嶋を会わせて、研究所の参加を説得したが、大久保は前嶋の満鉄入りを快諾したのであった。後日、前嶋は小林から真相を伝えられた。「小林君はちよつと感情を悪くしたらしかったのですが、あとで私〔前嶋―引用者注、以下同〕に打ち明けてくれました。『実はあの時に大久保さんと自分〔小林〕との間が険悪になっていた。だから君〔前嶋〕を緩衝地帯としてひっぱればうまくまとまると、それで入所をすすめたんだ』ということでした。……結局大久保さんとの間は決裂状態になり、間もなくやめ⁽³⁹⁾」たのであった。小林は、研究所を離脱後、時局に沿って職歴を歩んだ。駒澤大学から國學院大学に移籍し、陸軍士官学校教授や参謀本部囑託なども勤めた。戦後は進歩的な学者から軽視されたこともあったが、一九五五（昭和三〇）年、大東文化大学教授に就任後、一九五六（昭和三一）年二月には中東調査会（二九六〇年外務省所轄の財団法人認可）を設立して、常務理事として運営の中心を担うなど、戦後の中東研究に寄与している。

一九四〇（昭和一五）年四月、回教圏研究所と改称され、同年夏には東京市渋谷区原宿三丁目三三〇番地（現東京都渋谷区神宮前一丁目三番）に移転した。スタッフが若干入れ替り、所長大久保幸次、研究部に主任の野原四郎、蒲生礼一、鈴木朝英、宮坂好安、村野孝、幾志直方、佐木秋夫、竹内好、鏡島寛之、井筒俊彦、幼方直吉らが在籍し

た。大久保は、研究体制の更なる再編を構想していた。研究員の鏡島寛之が、知人の飯田利行に宛てた私信（一九四〇年六月二日付）によれば、「研究所もだん／＼組織をかへて、回教関係だけでなく、「ローヤル・アジアティック・ソサエティ」、乃至は「東方文化」のやうに将来は東洋学研究所にして、その中に色々な分科を作りたい希望を大久保所長は考へてゐる由です⁽⁴⁰⁾」と述べている。前記の組織は、英国の王立アジア協会（Royal Asiatic Society 一八三三年設立）、および日本の外務省所管の研究機関・東方文化学院（一九二九年設立、一九四八年廃止）を指したが、大久保の目指した東洋学研究所構想は、最後まで実現しなかった。

一方で大久保は、一九四一（昭和一六）年の太平洋戦争の開戦前後から、イスラーム研究の学識経験者という立場から、盛んに講演活動を行っていた。例えば、一九四二（昭和一七）年六月の文部省主催の「南方宗教講座」では、「南方回教圏の特質」と題して講演した。同講座は、宇野圓空、木村日紀、長井真琴、山本快龍らも講演している。時局を反映して「大東亜共栄圏」の宗教事情を扱った啓蒙的な講演会に、大久保はたびたび招聘されており、一九四三（昭和一八）年七月に開かれた天理教亜細亜文化研究所（現天理大学おやさと研究所）主催の「大東亜共栄圏宗教講座」でも、大久保は「共栄圏の宗教」を講演し、他に秋葉隆、宇野圓空、岡正雄らも講座を担当した。

こうして時局を契機として組織化された日本のイスラーム研究ではあったが、その研究方法や各機関が独自で活動した状況に、批判もあった。宗教問題研究所の雑誌『宗教公論』は、「学界情報——回教研究の方向」（一九四〇年一月号）にて、「今日の回教研究は、回教の世界、回教圏の研究であつて、宗教としての回教の研究ではない」と批判した上で各機関の活動状況を取り上げて、「諸団体間の軋轢が問題になつたが、学問上の論争は別として、感情的な対立を解消し、出来得べくんば協同研究にまで進むことを希望するものである」と論じた。また『東京朝日

新聞』は一九四〇（昭和二五）年八月一五日付の書評欄で、回教圏研究所の雑誌『回教圏』、大日本回教協会の雑誌『回教世界』のそれぞれ同年七月号を取り上げた。両者と共に外務省調査部から雑誌『回教事情』が発刊されている状況を取り上げて、「盛んなりともまだ無駄な共食ひなりとも見られる。希くは我国回教研究の方針と対策が確立せられ、統一的計画の下に仕事の分担を決め……、役所と民間諸団体との呼吸がもつと合つて然るべき」と主張した。一九四一（昭和一六）年からは回教懇談会が組織され、在京の回教圏研究所、外務省調査部、東亜研究所、満鉄東亜経済調査局の研究員らが参加して、たびたび研究会が開催されたが、共同研究までには至らなかった。その後、回教圏研究所は研究員の応召が相次ぐなか活動が続けられ、雑誌『回教圏』は、一九四四（昭和一九）年一月発行の八巻九号まで刊行された。そして一九四五（昭和二〇）年五月二四日、空襲により研究所の建物と蔵書は焼失し、敗戦直後に解散した。

戦後の大久保は、一九三九（昭和一四）年度から早稲田大学で担当していた講義「回教圏史」を継続していたが、敗戦直後の混乱期ゆえに研究活動は進まず、体調も崩し一九四九（昭和二四）年一二月に入院した。児童向けの『世界の宗教』（三省堂・社会科文庫、一九五〇年）を手掛けてはいたが、同書は病床で執筆を進めていた。

一九五〇（昭和二五）年四月一九日、大久保は再発した直腸ガンのため、六二歳で没した⁽⁴¹⁾。大久保の没後、関係者によって『コーラン研究』（刀江書院、一九五〇年）が刊行された。同書は、大久保の論考と、先の大戦で北ボルネオ・サンダカン方面にて戦死した研究員の鏡島寛之による論考と併せて所収された両者名義の遺著である。大久保の『イスラム教——岩波講座東洋思潮六』（岩波書店、一九三四年）、未完の「邦訳コーラン」（『回教圏』五巻五号から八巻九号まで全二四回、一九四一—一九四四年）、鏡島の「各国におけるコーランの翻訳」（『回教圏』六巻一号から七巻一号まで

全七回、一九四二―一九四三年）が再録された。

五 おわりに

以上、大久保幸次の人物像を軸に、回教圏研究所の活動を記述してきた。大正期より大久保は、トルコやイスラームの研究を進め、昭和に入るとイスラム文化研究所やイスラム学会を発足させた。さらに回教圏研究所を設立させるも、対内陸アジアへの文化工作を行った財団法人善隣協会に移管され、国策に寄与する研究体制に編成されていった過程が、本論により明らかになった。回教圏研究所と大久保の歴史的意義について強調したいのは次の点である。回教圏研究所が財団法人善隣協会の傘下にあったことは、たしかに政治による学の利用であった。だが学が独自の展開を示したとみなしうるのは、研究所に関わった複数の研究者が、戦後の中東・イスラーム研究を担った人物を輩出したことである。戦後の大久保は、ほとんど研究活動を進めておらず、戦後世代のイスラーム研究者には直接的な影響を与えなかった。しかし財団法人中東調査会の設立や運営に関わった小林元や岩永博は研究所の出身であり、蒲生礼一は、「私にイスラーム研究の重要性を教えられた回教圏研究所長故大久保幸次先生の達見とイスラーム教徒らに対する深い深い愛情を憶い起さずにはいられません⁽⁴²⁾」と記しているなど、大久保は戦前と戦後の研究の橋渡しをしたと言えるのである。

あたかも板垣與一は、「学問は時代の必要の産物である。時代の要求に適合して、時代の必要に応じて、その視野を拡大し、またその視点を変えてゆくことは、学問の負わされた使命というものである⁽⁴³⁾」と自著の冒頭で問うている。板垣は、戦後に一橋大学などで経済学を講じたが、戦前はその前身の東京商科大学が設置した東亜経済研

究所に属し、陸軍軍属として動員され東南アジアで調査活動に従事した。板垣による戦後のアジア経済研究の足跡を見ると、結果として戦前の研究を土台にしていたことも頷けるのである。同じように昭和前期のイスラーム研究史は、従来まで検証が進んでいなかったが、現在からその研究蓄積を単純に否定するだけでは生産的ではない。学知が戦前と戦後の連続線上にあることを認識したうえで、研究の批判的継承が研究者には求められよう。今後、「イスラームと宗教研究」をめぐる領域において新たな地平を求めるならば、現代の研究者は、社会情勢に影響されたかつての研究の問題点を、共有していくことが望まれるのである。

注

- (1) 回教圏研究所員の野原四郎の言葉によれば、「支那事変をきっかけに、日本の回教研究は、始めて組織化された。それまでは、特別な少数の研究者によつて、思ひ思ひに好事的になされてきたといつて、よいであらう」（野原四郎「回教研究の役割」『回教圏』六巻一号、一九四二年、八頁）。
- (2) 大川周明（一八八六—一九五七）のイスラーム研究には、『回教概論』（慶応書房、一九四二年）、翻訳『古蘭』（岩崎書店、一九五〇年）などがある。宗教学において大川は、「明治四十四年／この年七月の宗教学科の卒業生は次の通り（カッコ内は卒業論文題目）。……大川周明（龍樹研究序論）」（藤井健志「東京大学宗教学科年譜資料（明治時代）」、田丸徳善編『日本の宗教学説』東京大学宗教学研究室、一九八二年、二八頁）と記録を残す。
- (3) 杉田英明『日本人の中東発見——逆遠近法のなかの比較文化史』東京大学出版会、一九九五年、一五八頁。
- (4) 例えば、野原四郎・蒲生礼一「回教圏研究所の思い出」（『東洋文化』三八号、一九六五年）、前嶋信次『アラビア学への途——わが人生のシルクロード』（日本放送出版協会、一九八二年）など。
- (5) 臼杵陽「戦時下回教研究の遺産——戦後日本のイスラーム地域研究のプロトタイプとして」（『思想』九四二号、二〇〇二年）、三沢伸生「大川周明と日本のイスラーム研究」（『東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年報』三七号、二〇〇二年）、店田廣文「戦中期日本におけるイスラーム研究——早稲田大学図書館所蔵「イスラーム文庫」の概要と研究課題」（『早稲田大学人間科

昭和前期におけるイスラーム研究

- 学研究』一五卷一号、二〇〇二年）など。
- (6) 白杵陽「九・一一」以降を中東地域研究者として思う」(『民博通信』九六号、二〇〇二年)、七―八頁。
- (7) 田坂興道「序言」(『中国における回教の伝来とその弘通 上巻』東洋文庫、一九六四年)、一九―二〇頁。田坂は、臨済宗南禅寺派の僧籍を有していた。
- (8) 「回教」の用法に関する批判として、例えば大塚和夫『イスラーム的——世界化時代の中で』(日本放送出版協会、二〇〇〇年、四―六頁)、小杉泰「イスラーム」(大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編集『岩波イスラーム辞典』岩波書店、二〇〇二年、一三二頁)を参照。
- (9) 鏡島寛之「回教教理」(回教圏研究所編『概観回教圏』誠文堂新光社、一九四二年)、一一頁。
- (10) 回教圏研究所の評価について、板垣雄三は「当時の諸研究機関の中ではもともとアカデミックな後世に残る仕事をした」との見解を示している(板垣雄三「一九三〇年代におけるイスラーム研究」『シンポジウム「わが国における中東地域研究に関する現状と展望」——報告と討論の記録(抄)』国立民族学博物館杉村研究室内・同シンポジウム事務局、一九七九年、一三三頁)。
- (11) 本論に関わる先行研究は、田村愛理「回教圏研究所をめぐって——その人と時代」(『学習院史学』二五号、一九八七年)、川村光郎「戦前日本のイスラーム研究・中東研究小史——昭和一〇年代を中心に」(『日本中東学会年報』二号、一九八七年)など。
- (12) 前嶋信次「イスラーム研究ブームとはじめ——先次大戦末までの思い出」(『日本とアラブ——思い出の記 その一』日本アラブ関係国際共同研究国内委員会事務局、一九八〇年)、三頁。
- (13) 羽田正「歴史学・東洋学とイスラーム地域研究」(佐藤次高編『イスラーム地域研究の可能性——イスラーム地域研究叢書一』東京大学出版会、二〇〇三年)、三二頁。
- (14) 戦前期の『宗教研究』(宗教研究会／日本宗教学会)に掲載された、中東・イスラーム関係の論考を提示しておく。
論文は、一九二六年、赤松智城「近東に於ける回教民族の動乱に就いて」(新第三巻第一―三号)。一九三〇年、赤松智城「現代回教の危機」(臨時特輯号「現代宗教批判」)。一九四〇年、佐木秋夫「自信の体制としての回教」(第二年第四輯「第六回大会紀要」)。一九四一年、赤松智城「満洲の回教に就いて」(第三年第二輯)、八木亀太郎「回教に於ける Tasawwuf の分類に関する考察——特に akhliaq への発展に就いて」(同)、諸井慶徳「回教神秘主義——特にその信仰の実相に就いて」(第三年第三輯)、馬淵東一「インドネシア未開民に於ける宗教・政治運動」(第三年第四輯)、足利惇氏「古代イランの文化と宗教」(同)。一九四二年、小林元「コーランか剣か——サラセン史研究に寄せて」(第四年第一輯)、赤松智城「回教と近代思想」(第四年第二・三輯)、小口偉一「回教的社会結合」(同)。一九四三年、柴野恭堂「回教神秘主義について」(第四年第四輯「第七回大会紀

要〕、鏡島寛之「回教の「キブラ」について」(同)。

書評は、一九三四年、高田〔修〕「田中於菟彌 波斯関係図書目録(啓明会紀要第十五号)」(新第一一卷第五号)。一九三六年、八木亀太郎「Arberry, A. J., *The Doctrine of the Sufis*, Cambridge, 1935」(新第一三卷第三号)、佐木秋夫「大久保幸次・小林元共著 現代回教圏 四海書房」(新第一三卷第五号)など。

なお一九三一年、古澤安二郎「彙報」日本に於ける回教の確立」(新第八卷第二号)もある。

(15) 竹内好「転形期(一九六二年)」『竹内好全集第一六卷——日記下』筑摩書房、一九八二、二一九—二二〇頁。

(16) 竹内好「大川周明のアジア研究」『竹内好全集第八卷——近代日本の思想 人間の解放と教育』筑摩書房、一九八〇年、一八〇頁。

(17) 大村謙太郎(一八八八—一九六二)の没後、松田壽男らは「戦争による日本のイスラム研究成果発表の中絶を、十八年でくいとめようとする悲願」から学術雑誌『イスラム世界』を刊行し、「日本イスラム協会を再発足させる際に、切に戒しめあつたことは、政治の動きや宗教との結び付きから切りはなして、「イスラム学」に独自の地位を確立させること」を目的とした(『発刊のことば』『イスラム世界』一号、一九六三年、二頁)。なお大村謙太郎には『ティベット史概説』(西藏大蔵経研究会、一九五八年)の著作もある。

(18) 大久保幸次「コラーンの研究(一)」『独逸語学雑誌』一八巻八号、一九一五年、二三頁。なお同巻八号の目次は「回々教経文コラーン研究」、表題は「KORĀNの研究(一)」。九号目次は「コラーン経典の研究」、表題は「コラーンの研究(II)」。一〇号目次は「回々教経文コラーン研究」、表題は「コラーンの研究(II)」とある。各号で表題や号数が統一されておらず、ここでは便宜上、「コラーンの研究」とする。

(19) 西洋のイスラーム研究史は、ヨハン・フュック著・井村行子訳『アラブ・イスラーム研究誌——二〇世紀初頭までのヨーロッパにおける』(法政大学出版局、二〇〇二年)を参照。同書ならびに西洋のイスラーム研究史の概略については、菊地達也氏より示教を受けた。

(20) 注(4)の前嶋、五九頁。

(21) 大久保幸次「日本へ来たロシアの回々教徒避難民について 一」『国際知識』四巻二号、一九二四年、九七頁。

(22) 大久保幸次「極東に動くトルコ民族」『日本及日本人』六〇号、一九二四年、一一頁。

(23) 前掲論文、七—八頁。

(24) 一九四一年九月、仏教学者の宇井伯寿が東京帝国大学教授職のまま駒澤大学学長に就任した。しかし宇井や学長参与の林屋友

次郎らの大学運営をめぐる一部教職員や曹洞宗務院（現宗務庁）が反発して、内紛が生じた。翌年二月に宇井は学長を辞職し、曹洞宗僧籍を離脱した（一九四五年復籍）。宇井に同調する大久保幸次や圭室諦成ら複数の教員も、集団辞職した。角田春雄「宇井伯寿博士自伝紹介」（『印度学仏教学研究』一六巻二号、一九六八年）、飯田利行「宇井伯寿博士」（『空林拾葉録』中外日報社、一九九六年）を参照。

(25) 山内舜雄・駒澤大学名誉教授への筆者インタビュー（二〇〇一年六月二〇日）。

(26) 菊地良一・元足利工業大学教授への筆者インタビュー（二〇〇一年八月一八日）。

(27) 大久保幸次と共に回教圏研究所を設立した松田壽男と小林元の略歴を付す。

松田壽男（一九〇三—一九八二）は、一九二八年東京帝国大学文学部東洋史学科卒業後（卒業論文「隋代を中心として突厥と西域北道諸国との関係を論ず」）、同大学院を経て、東洋大学、大正大学、東京文理科大学、九州帝国大学、駒澤大学等の講師を務め、一九三六年より國學院大学教授。後に京城帝国大学教授等。戦後は早稲田大学教授。

小林元（一九〇四—一九六三）は、一九二八年東京帝国大学文学部西洋史学科を卒業後（卒業論文「アッバース朝における回教文化」）、日本大学講師などを経て、一九三〇年駒澤大学講師、後に教授となり一九四二年まで在職。回教圏研究所からの離脱以降は、本論第四節を参照。

(28) 「イスラーム文化研究所設立趣旨」（『イスラーム文化』一号、一九三二年）、一頁。

(29) 大久保幸次「新興トルコの特異性」（『日土協会会報』二二号）、二二頁。トルコ視察の様子は、大久保幸次「土耳其国出張経過報告書」（『日土協会会報』二二号、一九三七年）、無署名記事「日土文化使節 大久保本学教授帰る」（『駒澤大学新聞』三七号、一九三七年二月一〇日）を参照。

(30) 小林元『国際政治と中東問題』故小林元教授遺著刊行会、一九六四年、六頁。

(31) 「回教圏」の範囲を明記しておく。一九四〇年一〇月に回教圏研究所が発行した小冊子『財団法人善隣協会回教圏研究所概要』では、「本所の研究対象は「回教」であり、これを回教圏における民族・文化等の諸面より討究し、もつて国策の要求に応へ、また、わが国人のこの方面に関する知識を啓蒙し、さらに回教圏諸国との文化提携に努めんとするものである／但し、「回教圏」とは左の諸地域を包括する／満蒙・支那・蘭印その他の南洋・インド・アフガニスタン・イラン・ソ連・バルカン・トルコ・アラビア系諸国・エジプト・アフリカ」とある。

(32) 元回教圏研究所員、岩永博・法政大学名誉教授への筆者インタビュー（二〇〇一年八月一〇日）。

(33) 「回教圏攷究所彙報」（『回教圏』一卷一号、一九三八年）、九六頁。「回教圏攷究所設立趣旨」は同号に転載。

- (34) 大久保幸次『回教に就いて——日本文化第二十九冊』日本文化協会、一九三八年、五一―六頁。
- (35) 注(16)と同じ、一九八頁。
- (36) 文書「回教及猶太問題委員会ニ関スル件」(一九三八年四月二日付。外務次官堀内謙介より陸軍次官梅津美治郎宛)。防衛庁防衛研究所蔵。
- (37) 小林元『回回』博文館、一九四〇年、二五頁。
- (38) 岸本英夫「矢吹先生を偲ぶ」(『宗教研究』一〇〇号、一九三九年)、二〇五頁。
- (39) 注(12)と同じ、一七一―一八頁。
- (40) 鏡島寛之書簡は、東京・曹洞宗全長寺飯田利行師より拝借した。鏡島については、拙稿「鏡島寛之によるイスラーム研究の史的意義」(『宗学研究』四四号、二〇〇二年)を参照。
- (41) 大久保幸次は、法名を「正覺院法回日幸居士」とし、菩提寺の東京都新宿区原町の日蓮宗幸國寺に埋葬されている。大久保の没後、蔵書が各方面で分蔵された。水谷史子「立教大学新規トルコ・イスラーム研究関連書籍目録——大久保幸次氏旧蔵図書より」(『立教大学大学院東洋史学論集』三号、二〇〇〇年)、三沢伸生「戦前・戦中期の満洲におけるイスラーム関係逐次刊行物——大久保幸次の収集したコレクションの紹介」(『東洋大学アジア文化研究所研究年報』三八号、二〇〇四年)を参照。
- (42) 蒲生礼一『イスラーム』岩波書店、一九五八年、ii頁。
- (43) 板垣與一『アジアの民族主義と経済発展——東南アジア近代化の起点』東洋経済新報社、一九六二年、iii頁。